

## 7月1日 年間第13主日

知 1:13-15, 2:23-24    IIコリ 8:7~15    マコ 5:21~43

### 1. マコ(1)

v.30 「イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、……」

A.リチャードソンというたいへん有名なイギリスの神学者が、今から70年ほど前にその著書の中でおよそ次のように述べました。“奇跡物語りは福音書の欠くことの出来ない、また切り離すことの出来ない部分をなすが、その目的は、イエスの神秘を教え、それが信じる人々にとってどういう意味を持つかを示すために、原始教会のキリスト教伝道者たちが用いた教育技術の特色ある一部をなしていた。”

つまり、それらは原始教会の説教の一部であって、私たち現代のキリスト者は、そこから当時の宣教者たちが説教した“信仰”を聞き取らなければならないのです。私たちはその信仰の定式化されたものを、使徒信条によって知っています。それは、「聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン」というものです。

病は罪の結果、罪に対する罰として、当時の人々には理解されていました。それはまた旧約聖書全般に見られる考え方でもあります。そのような背景でイエスによるいやしの奇跡が説教されるとき、それは神による罪の赦しが起こったことの象徴ないし証明でありました。この女は出血の病のために祭儀上汚れていて、他の人に近づいてその汚れをうつしてはなりません。それなのに彼女は、群衆の中に紛れ込んでイエスの服に触れたのです。「震えながら進み出てひれ伏し」(v.33)とは、救いを与える力がイエスから出るのを体験した“罪人”の姿の表現です。他の大勢の群衆もイエスを取り囲んでいたけれども、彼らはイエスの恵みある力を知らない……。

v.34 「イエスは言われた。“娘よ、あなたの信仰があなたを救った。”」

自分が汚れた罪人であることを意識しながら、信仰をもってイエスのもとに来る者だけが、罪の赦しを得て聖徒の交わりに加えられる、と教えた当時の説教が聞こえて来るではありませんか。

### 2. マコ(2)

v.36 「恐れることはない。ただ信じなさい。」

イエスの奇跡が指し示している意味を信じる、つまり“罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます”という信仰を教えるために、原始教会の説教者はこのヤイロの娘の復活物語りを語ったに違いありません。「人々はイエスをあざ笑った」(v.40) 多くの人が教会が宣教する“復活の望み”を嘲笑するだろうが、再臨のキリストは来て「起きなさい」と命じられる。信じる者だけが神秘(Iコリ 15:51)を知ることを許される。他の者たちは閉め出される(ルカ 13:25-29)。

死を“眠り”であると説明する新約聖書の表現を、現代人は軽視してはなりません。“彼らは滅んでし

まったのではない、ただ神が「起きなさい」と命じられる日を待っているのだ”と、教会は今も宣教し続けているのですから。「また、復活の希望をもって眠りについたわたしたちの兄弟と、すべての死者を心に留め、あなたの光の中に受け入れてください。」(第二奉献文)

### 3. II コリ

v.9 「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。」

これはエルサレム教会の窮乏を助けるための異邦人教会からの援助について、パウロが奨めている手紙の一節ですが、私たちはこれを世間一般の慈善と同じように理解してはなりません。聖書のイエスを、ただの気前の良い太っ腹な主人のように考えるのと、「主イエス・キリストの恵みを知る」(v.9)こととは、全く別のことなのです。

これはキリストの受肉の出来事を指していて、“神の身分でありながら、自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられたこと”(フィリ2:6-7)、“わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったこと”(ロマ5:8)、“父なる神がわたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡されたこと”(ロマ8:32)だからです。エルサレム教会から始まった福音の宣教によって、異邦人はその霊的なものにあずかったのだから、今彼らの窮乏を助ける義務があるとパウロは言ったのです(ロマ15:26-27)。

現代の私たちがミサのことばの典礼で、聖書を通して使徒たちと原始教会の宣教者の説教の片鱗に触れることが出来る幸いを、感謝しましょう。私たち信者は、ことばの典礼を通して、善意と慈愛に満ちた美しいイエス物語りではなくて、そのために命をかけた使徒と殉教者の宣教を、確かに聞いているのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 7月8日 年間第14主日

エゼ 2:2~5    IIコリ 12:7b~10    マコ 6:1~6

### 1. マコ

v.6 「そして、人々の不信仰に驚かれた。」

今朝のミサに集まっている私たちに向かって、イエスが“その不信仰を驚いておられる”ということに、もし私たちの心が痛まないとしたら……。しかし原始教会の福音宣教は、人々が先ずこの“痛み”に目覚め、十字架につけられたキリストを救い主として信じるようになることを、第一の目標にしていました(Iコリ 1:18-31)。現代の私たちは、神の右の座に着かれたイエスが今も、「人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか」(ルカ 18:8)と、心配し続けておられることを忘れてはなりません。

この故郷の町での、イエスが受けられた不名誉な出来事にわざわざ立ち会うために「弟子たちも従った」(v.1)のだという理解を、マルコ福音書はここに書き入れているように推測されます。その弟子たちがやがて宣べ伝えるようになった救い主は、「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」(Iペト 2:7)キリスト、“低くされたキリスト”(フィリ 2:6-11)であったからです。

初代教会でイエスは“おとめマリアから生まれ”という信仰が宣言されるに至る以前、すでにユダヤ人の中で“イエスはマリアの子(ヨセフの子ではない)”という侮辱の言葉が語られていたという可能性は、かなり高いように思われます(ヨハ 8:41, 9:24 参照)。その上故郷の人々にとっては、イエスはよく知られた並の人、むしろ「見るべき面影はなく、輝かしい風格もなく、軽蔑され、無視された」(イザ 53:2-3)人ではかありませんでした。しかし、「人々はイエスにつまずいた」(v.3)とは、決して他人事ではなくて、実に共にミサをささげている私たちを目覚めさせるための言葉なのです。ことばの典礼と感謝の典礼を通して、今朝もキリストが“御自分の教会と共に現存しておられる”(典礼憲章 7)ことを信じることの出来ない人は、神に対してつまずいているのです。どうして神の輝かしい恵みをたたえる(エフェ 1:6)ことが出来るでしょうか。

このイエスを、神は死者のうちから復活させられました。そして「神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」(フィリ 2:9) 私たちは今朝の福音書のテキストを、そのような原始教会の説教から、決して切り離して考えるべきではありません。

### 2. IIコリ

私たちはここで、“使徒パウロの誇り”(10章の小見出し)を聞いています。そして昔から多くの人たちが、信心深い敬虔とはそのような“誇り”を見習うことであるように理解して来ました。「キリストの力がわたしの内に宿るように」(v.9)、「なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」(v.10)。なんと美しい敬虔、なんと素晴らしい誇りでしょう。

「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか。」(11:29) 使徒パウロは“十字架につけられたキリスト(の福音)を宣べ伝える”(Iコリ1:23)力が、自分の「弱さの中でこそ十分に発揮された」(v.9)ことを誇りました。「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」(Iコリ9:23)という目的のためにこそ、あらゆる弱さと苦難を耐え忍びました(11:23-28)。この目的が見失われると、そこには人間的な美徳と誇り高い敬虔だけが残ることになります。

### 3. エゼ

v.5 「彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。」

「預言者がいた」とは、どういう意味でしょうか。それは来るべきキリストを待望する神のことだが、確かに語られていたということなのです(Iペト1:10-12参照)。そして、新約聖書では預言者という呼称は、まさにキリストの福音の宣教と結びつけて使われているのです(マコ6:4、エフェ2:20)。

ある意味でそれは、来るべき神の裁きを警告するということでもありますが、誤解してならないのは、預言者は決して審判者ではないということです。特にプロテスタント系の原理主義的な教派の人々が、福音宣教ということを誤解して、自分たち自身がまるで審判者になったような気分で激しく糾弾するのに出会うことがあります。インターネットサイトでは、むしろそのような過激な書き込みが氾濫していて、ただ見苦しいだけではなく、かなり深刻な迷惑をまき散らしているのが実状です。

神がエゼキエルを預言者として遣わされたその目的が見失われると、そこにはイスラエルの民に対する非難と攻撃だけが残ることになります。そのように聖書を誤解し、そのようにキリスト教信仰というものを考えてしまう人たちが、実際には多いのです。

しかし私たちが、キリスト教的敬虔を誇るときにも、教会の宣教や奉仕活動に参加するときにも、決して“信じる者すべてに救いをもたらす神の福音を告げ知らせる”という、本来の目的を忘れることがありませんように。そうすれば、私たちは使徒パウロと共に次のように言うことができます。「キリストがわたしを通して働かれたこと以外、あえて何も申しません。」(ロマ15:18) 栄光が神にありますように(ロマ16:27)。

アーメン、ハレルヤ。

## 7月15日 年間第15主日

アモ 7:12～15 エフェ 1:3～14 マコ 6:7～13

### 1. エフェ

v.13 「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。」

すべてのカトリック信者は、洗礼、堅信、聖体の三つの秘跡(入信の秘跡／カトリック教会のカテキズム p.379 以下)を受けて、現在の信仰生活を歩み始めました。たとえそれがどんなに幼稚で初歩的な理解であったとしても、悔い改めて福音を信じるようになったこと、教会の信仰宣言を共に唱える会衆の一人となったことは、間違いありません。そして確かに「聖霊で証印を押されたのです。」

それで……、私たち一人一人はそれ以来おおいに成長して、“あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされ、キリスト(の福音)についての証しがますます確かなものとなった”(1コリ1:5-6)かと言うと、これは個人差がたいへん大きくて、一概にそうだとは言いきれないのが実情です。

その福音の内容とは、先ず第一に私たちがキリストの血によって贖われ、罪を赦されたこと(v.7)、第二には秘められた計画(v.9)、すなわち私たちが御国を受け継ぐという希望を与えられたことであって(v.14)、この福音への信仰を宣言し、キリストの体である教会を造り上げてゆくこと(エフェ 4:12／教会憲章 32)と、この福音をすべての人に宣べ伝える使命(マコ 16:15／教会憲章 33)は、神の民全体に(信徒、修道者、聖職者に平等に／教会憲章 30)委ねられた聖なる使命であります。

多くの教会の主日のミサで使われている“聖書と典礼”には、共同祈願の意向(例文)が掲載されていて、その中に「わたしたちが… 多くの人に福音を告げ知らせることができるよう」という文章がかなり頻りに登場します。私は、この祈りを唱える当日の奉仕者が本当に自分で福音を理解しているのだろうかと考えて、あるいは心を痛め、あるいは主のあわれみを願わずにはいられないのです。

私たちはしばしば、“福音”“救い”“信仰”などというキリスト教のイロハが分かっていない、理解出来ていないということを、白状せざるを得ないのではないのでしょうか。だからこそ、今年の10月11日から始まる“信仰年”が告示されたのです。教皇ベネディクト十六世の次の言葉は、世界中の司教たちや司祭たちは言うまでもなく、私たちすべての信徒への呼びかけでもあります。「主が与えてくださったこの霊的恵みの時に、信仰という尊い賜物をわたしと共に思い起こしてください。」

### 2. マコ

v.12 「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。」

これは使徒たちだけの話であって、信徒には関係がないなどと思ってはなりません。ルカ 6:13 を参照すると、もっとたくさんの弟子たちが呼び集められ、その中から十二人がいわば代表として選ばれています。

彼らはすべて、「(イエスが)これと思う人々(ご自分の望む人たち/フランシスコ会訳)」(3:13)でありました。原始教会の福音宣教は実際、使徒たちだけではなくて多くの信徒たちの積極的な活動によって進められていました(使 11:19-21、Iテサ 1:8 参照)。

彼らの宣教は、イエス・キリストによって実現された救いへの「信仰による従順」(ロマ 1:5)を宣べ伝える、“悔い改めの福音”(1:15)の宣教でありました。そしてその初代教会の福音宣教への基本姿勢の源泉が、この福音書に書かれたイエスによる十二人の派遣の物語りであったことを、私たちは理解します。当時その宣教に伴って、彼らは多くの悪霊を追い出し、多くの病人をいやしましたが(v.13)、それは彼らの人間的な能力による業ではなくて、イエスから授けられた「汚れた霊に対する権能」(v.7)によってでありました。

使徒であるにせよ、信徒であるにせよ、これらの働き人たちはすべて、“(イエスが)これとあって呼び集められた”という召命を自覚し、感謝している“恵みを受けた人々”であったに違いありません。今朝この福音書のテキストに耳を傾ける会衆の中にも、同じ恵みによって“心を燃やす”(II コリ 11:29)人たちがいるに違いないことを、私たちは今も期待してよいのです。

### 3. アモ

アモスは当時のいわゆる職業預言者でも、またそのような預言者団の弟子でもありませんでした。

w.14-15 「わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、“行って、わが民イスラエルに預言せよ”と言われた。」

彼は彗星のごとくに現れ、彗星のごとくに短期間で消えた素人預言者でありました。それにもかかわらず彼の活動は、旧約預言の歴史において特筆すべき画期的意義を持ったものでありました。アモスにおいて初めて神の民イスラエルは、神の審判の対象以外の何ものでもないことが告げられたのでした(3:2)。

「神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉(福音)をわたしたちにゆだねられたのです。」(II コリ 5:19) これがキリストの教会です。そのゆだねられた福音を宣べ伝えさせるために、“(イエスが)これとあって呼び寄せられる弟子”が、現代の教会にも必ず起こされることを私たちは期待してよいのです。その可能性は信徒、修道者、聖職者に平等に向けられているのですから(教会憲章 30)。                      アーメン、ハレルヤ。

## 7月22日 年間第16主日

エレ 23:1～6 エフェ 2:13～18 マコ 6:30～34

### 1. マコ

v.34 「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」

確かに教会は、「使徒や預言者という土台の上に建てられて」(エフェ 2:20)いるのですが、その使徒たちはイエスによって遣わされ、その働きをイエスに報告する人々でありました。私たち信者を教え、信じる者すべてに救いをもたらす方はイエス・キリストであるという、いわば最も基本的なことに注目しましょう。なぜなら実際にはしばしば、人間の声高な社会的政治的発言の数々が、聖書を沈黙させ、キリストのことばをかき消してしまっている、そんなキリスト教ばかりが目立つからです。教会の現実の姿は、「飼い主のいない羊のような有様」であることの方が、いつの時代にも多いのです。

今から100年ほど前に、西欧のキリスト教を支配した“歴史のイエス再発見”という、教会の伝統的な教えを否定するような考え方の名残が、意外なことに現代でも素朴な人々を迷わせて、“信仰とは昔イエスが教えた美しく崇高な教えを信奉することだ”と思い込ませている傾向があります。しかし実際には今日キリストは、御自分の死と復活の記念を託されたミサを通して、現代の私たちに「いろいろと教え始められる」のです。実にミサの祭儀は、キリスト者の生活全体の中心であり、「卓越した聖なる行為であって、その効果において、教会の他のいかなる活動も、同等の理由や程度でこれに匹敵するものはない」(典礼憲章7)ことを、理解しましょう。

キリストがその死と復活によって実現された福音に聞き、信じて罪の赦しを受けること、御国を受け継ぐ希望に生きること、それが本当の意味で「キリストの言葉を聞く」(ロマ 10:17)ことなのです。私たちはそのように理解し、そのようにイエスのところに集まる(v.30)信者になろうではありませんか。

### 2. エフェ

私たち異邦人は元来、「キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく」(2:12)、「以前は自分の過ちと罪のために死んでいた」(2:1)者であることを、全く知らない現代の信者が多いのです。「救いはユダヤ人から来るからだ」(ヨハ 4:22)というイエスの言葉を、あなたは聞いたことがないのですか。むしろ私たちはローマ兵の百人隊長と共に、「わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」(マタ 8:8、ルカ 7:6)と言うべきなのです。

v.13 「しかしあなたがたは、以前は(救いの約束から)遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。」

かつては旧約のイスラエルだけに約束されていた神の国の約束が、今や異邦人にも告げ知らされまし

た。それはイエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義であって、「この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださるのです。」(ロマ 3:30) 「わたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて ……」(v.18)

### 3. エレ

v.5-6 「わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。王は治め、栄え、この国に正義と恵みの業を行う。 …… 彼の名は、“主は我らの正義” と呼ばれる。」

私たちの救い主イエスは、「ダビデの子孫から生まれ」(ロマ 1:3)ました。天使ガブリエルはマリアに告げて、「神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる」と語りました(ルカ 1:32)。この救い主を通して「神の義が啓示されました。」(ロマ 3:21) そうなのです。「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17)

これは「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。」(ロマ 3:22) 決して人間が作り出す正義でも平和でもないのです。「父のふところにいる独り子である神」(ヨハ 1:18)、イエス・キリストだけが、私たちがそこに集まって来て福音を聞くことの出来る、唯一の真の牧者なのです。

アーメン、ハレルヤ。



## 7月29日 年間第17主日

王下 4:42~44 エフェ 4:1~6 ヨハ 6:1~15

### 1. ヨハ

v.4 「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。」

ヨハネ福音書はここで、この物語りを聞く私たちが主日のミサに心を向けるようにと、この言葉を意図的に挿入しました。カトリック教会の“典礼暦年と典礼暦に関する一般原則”が次のように述べていることを、私たちは直ちに思い起こさなければなりません。「毎週の初めの日は、主の日、または主日と呼ばれるが、その日に教会は、キリストの復活の当日にまでさかのぼる使徒伝承により、過越の神秘を祝う。このため主日は、根源の祝日としなければならない。」

福音書が語っているのは、確かに人々がかつて身近に触れ体験した歴史のイエスの記憶でありつつ、しかも今やその死と復活によって教会の主またキリストとなられたイエスであって、それは福音への信仰によって読者がその救いに与ることを目的として物語られているのです。そう言う意味でヨハネは「しるし」という言葉を使いました(v.14, 2:11,23, 3:54, 20:30 他)。

vv.5-6 「イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、“この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか”と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。」

現代の窮乏と悲惨を解決するために、“どこでパンを買えばよいだろうか”と、私たちはしばしば考えます。世界の、日本の、いろいろな悲惨と窮乏を、私たちの信仰と善意と愛によって解決するのがキリスト教会の使命であるという、そんな夢が実現可能であるかどうか本気になって考えるために、イエスはこのテキストを通して私たちを試みておられるのかも知れません。当時も、イエスを味方に付ければ食糧問題は解決する可能性が大いにあったと考えた人々がいました。彼らはイエスを王にするために連れて行こうとしました(v.15)。しかし、人間の考える理想を実現するために神を利用しようと思ったりする人々は、やがてそんな都合の良い神様はいないことに気づいて、結局失望するのです(6:60)。

### 2. エフェ

「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」(II コリ 5:18)、ユダヤ人と異邦人が共に御国を受け継ぐという「一つの希望」(v.4)にあずかる教会に、私たちを招き入れてくださいました。このキリストによって「信仰は一つ、洗礼は一つ」(v.5)、そして唯一の父なる神が働いてくださる(v.6)教会は一つであります(v.4)。

この神の働きの頂点がミサ典礼であり、教会のあらゆる力がミサ典礼を通して流れ出るということを(典礼憲章 10)、私たちは深く理解しなければなりません。なぜなら今なお我が国のカトリック信者の多くが、残

念ながらそのことに無知あるいは無自覚であるのが実状だからです。

“福音宣教誌 8・9月合併号”が“日本の典礼刷新”を特集していて、その中で山本量太郎神父が思い出話を書いておられます。土屋吉正師から典礼憲章について教えられた初めの頃には、「典礼という儀式を中心に教会づくりを進めていくなんで時代錯誤」とさえ考えたとのこと。「しかし、土屋師のもとで、典礼は教会の源泉かつ頂点であることを典礼憲章から学び、典礼は単なる儀式ではなく、教会が見えるかたちで現れる場であり、教会のいのちをその隅々にまで浸透させるために、典礼を深く生きることが大切だ、と繰り返し教えられました。」そして“聖書と典礼”の編集長を務められるようになったというのです。

私たちの教会でも主日のミサのために無料で配布されている、せっかくの“聖書と典礼”から、今までこのような心意気を感じ取って来ただろうかと、反省してみましよう。

### 3. 王下

v.44 「召使いがそれを配ったところ、主の言葉のとおり彼らは食べきれずに残した。」

エリシャも、その召使いも、みな間違いなく信仰の人でありました。しかし、働かれたのは神であったことを、私たちは見落としてはならないのです。

私たちは、“この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受ける”(ヨハ1:16)のために、“キリストと共に”主日のミサをささげようではありませんか。「ミサの祭儀は、キリストの行為であり、…神の民の行為であって、… 実に、ミサの中にキリストにおいて世を聖とされる神の働きの頂点があり、また人々が、神の子キリストによって父にささげる礼拝の頂点がある。……キリスト者の生活のすべての行いはミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられている」(ミサ典礼書の総則 1)のですから。

アーメン、ハレルヤ。